

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：31403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K10649

研究課題名(和文) 認知症高齢者の摂食困難に対する施設職員の認識と多職種連携を促進させる要因

研究課題名(英文) Recognition of facility staff for elderly people with dementia who have feeding difficulties and factors that promote multidisciplinary collaboration that supports their food support

研究代表者

高田 由美 (TAKADA, YUMI)

日本赤十字秋田看護大学・看護学部看護学科・教授

研究者番号：90433888

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：摂食困難のある認知症高齢者に対する多職種連携を促進させる要因を明らかにすることを目的に研究を行った。研究(1)では看護職・介護職・管理栄養士を対象とした文献レビューとインタビュー調査から、多職種連携の促進要因として、認知症症状の特徴、多職種による情報共有の必要性及び食事摂取の改善効果を認識していることが示唆された。研究(2)では施設職員の認識と多職種連携との関連について質問紙調査を行い、施設職員が食事に関する情報を更新する必要性を認識することが多職種連携と関連していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

摂食困難のある認知症高齢者に対する多職種連携を促進する要因は、認知症症状である認知機能レベルの変動性について理解し、認知症高齢者の摂食能力を維持することにつながるものであった。本研究は、今後、認知症高齢者への食支援に対する介護施設での現任教育の基礎資料、基礎教育における認知症高齢者への多職種連携の要点を抽出したという点において意義がある。

研究成果の概要(英文)：A study was conducted with the aim of clarifying the factors that promote multidisciplinary collaboration that supports dietary support for elderly people with dementia who have feeding difficulties. In the first phase study, the activity status of nurses, long-term care workers, and registered dietitians was examined from literature reviews and interview surveys. Recognizing the characteristics of dementia symptoms, the need for information sharing by multiple occupations, and the effect of improving dietary intake were shown as factors promoting multidisciplinary collaboration. In the second phase, a questionnaire survey on the relationship between the awareness of facility staff and multidisciplinary collaboration was conducted, and the recognition of the need for facility staff to update information on meals was an opportunity for multidisciplinary collaboration.

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症高齢者 多職種連携 摂食困難

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2015年度介護報酬改定によって、多職種による食事の観察やカンファレンス等の取り組みのプロセス及び口腔機能を踏まえた経口維持支援に対し加算が付くようになった。この取り組みによって、対象者の体重増加や職員のモチベーションの向上(みずほ情報総研, 2012)に繋がっているが、2017年度の経口維持加算の算定率はまだ3割程度である。また、認知症高齢者の食事ケアに直接携わる介護職には多職種の協働の必要性を感じていないものもあり(笹谷, 2013)、多職種連携はうまく推進していないと考えられた。

認知症高齢者は意思表示が困難な状況も予想され、施設職員が対象者の本意をどのように汲み取るか、その内容によっては施設職員主体で食事終了となってしまう懸念がある。実際、施設入所者に対する介助者側のペースによる水分の介助方法、施設職員の脱水への意識の希薄さ(梶井, 2012)という課題も散見していた。以上のことから、施設職員が認知症高齢者を多面的な視点から理解するためにも、多職種との連携体制を促進させることは喫緊の課題であった。

応募者らは、介護老人保健施設の入所者の食事量や心身面の変化に対する施設職員の気づきによるケアと体重との関係を明らかにすることを課題とし、3ヶ月間追跡調査した。入所者の経口摂取を維持するために多職種カンファレンスが有効であることはわかった。しかし、認知症高齢者に生じた摂食困難に対応する施設職員の認識に多職種カンファレンスがどのような役割を果たしたのは明らかでなかった。各職種の国家試験出題基準の認知症の出題項目数に大きな差もあり、認知症の教育内容の比重は違う。多職種カンファレンスによる施設職員の認識や対応の変化のなかに、互いの専門性を超えて連携を促進する要因を見出すことができると考えられた。

2. 研究の目的

本研究では、摂食困難のある認知症高齢者に対する施設職員の認識と対応との関連を明らかにし、認知症高齢者のケアにおける多職種連携を促進させる要因を探究することを目指し、次の研究を行った。

研究(1)：摂食困難のある認知症高齢者に対して多職種連携を促進させる要因の探索

介護職や看護師、管理栄養士の基礎教育における認知症高齢者の摂食困難を理解する視点の違いや連携上の課題を明確にする。

摂食困難のある認知症高齢者に対する施設職員の認識と対応、多職種連携を通じた変化について明らかにする。

研究(2)：摂食困難のある認知症高齢者に対する施設職員の認識と多職種連携との関連の検証

摂食困難のある認知症高齢者に対する施設職員の認識と多職種連携との関連を明らかにする。

3. 研究の方法

研究(1) 摂食困難のある認知症高齢者に対して多職種連携を促進させる要因の探索

2018年9月の時点で、東北圏内にある看護師・管理栄養士・介護福祉士を養成する短大・大学のホームページに掲載されているシラバスから、「認知症」「食事」「栄養」をキーワードとした教育内容を含む科目のテキストの記載内容を質的に分析した。

東北地区にある介護老人保健施設7施設の看護職、介護職、管理栄養士を対象に、「多職種連携を通じた認知症者の摂食困難に対する認識の変化」、「多職種連携を促進するために必要な情報」について半構造的面接調査を実施、質的に分析した。

研究(2) 摂食困難のある認知症高齢者に対する施設職員の認識と多職種連携との関連の検証

研究協力の得られた東北圏内にある介護老人保健施設62施設の施設職員269名を対象に質問紙調査を行った。調査は、基本属性（性別、年齢、職種、勤続年数、食支援に関する研修、介護老人保健施設のタイプ、経口維持加算 ・ の算定状況） 認知症高齢者の食事摂取の課題に対する認識、摂食困難のある認知症高齢者への対応、チームワーク尺度（三沢）の無記名自記式質問紙調査を実施した。摂食困難のある認知症高齢者への対応を示す質問項目は、因子分析（最尤法）により「対象理解の援助」（ $r = .825$ ）「満足感への配慮」（ $r = .810$ ）の2因子を抽出した。認知症高齢者の食事摂取の課題に対する認識の回答選択群間の認知症高齢者への対応の尺度得点とチームワーク尺度得点をクラスカルウォリス検定で比較した。

4. 研究成果

研究(1) 摂食困難のある認知症高齢者に対して多職種連携を促進させる要因の探索

看護師は老年看護学のテキスト7冊、管理栄養士は病態栄養学のテキスト5冊、介護福祉士は認知症の理解と生活支援技術から5冊を分析対象とした。分析結果から、「認知機能低下による食行動への影響」「認知機能と栄養との関連」「食事の観察と評価」「残存機能の活用と促進」「栄養状態の維持と悪化予防」「食事による心地よさの提供」「食事前の環境調整」「認知症者に接する態度」「食事援助における連携」の9カテゴリが得られた。全職種ともに認知症の中核症状が食行動へ影響するという教育内容が大半を占めていたが、認知機能レベルの変動による食事摂取量の減少についての記載はなかった。この内容を共通理解しておく、多職種による継続的な観察と相談が促進されると示唆された。認知症者の食事摂取量の減少の記載は共通していたが、栄養評価を除き、毎食後の評価はあまりなかった。食事摂取は全量摂取がベストであるという認識から、職員が認知症者へ食事を無理強いさせると指摘されていた。介護福祉士は“食事を中断する認知症者へ無理強いをしない”、看護師は“一定の期間内での食事等のバランスを見る”と食後評価に対する職種間の違いが明らかになった。

介護老人保健施設7施設の看護師7名、介護福祉士6名、管理栄養士8名の計21名を対象とし、多職種カンファレンスを通じた摂食困難のある認知症高齢者に対する認識と対応の変化についてインタビュー調査した。分析の結果、652コード、161サブカテゴリ、29カテゴリが抽出された。施設職員は、認知症高齢者の【食事摂取量減少への対応の限界】や【単独職種では解決できない課題の認識】をしていた。多職種による食事観察やカンファレンスへの参加は、【多職種連携による摂食困難が解決することの理解】【多職種の意見による対象者やケアによる気づき】【無理に食事を勧めることによる弊害への理解】を促していた。また、認知症ケアは【多職種の情報による認知症者の真の姿への接近】【可能な限りの援助への挑戦】【認知症者本人の気持ちへの積極的な働きかけ】に変化していることがわかった。

研究(2) 摂食困難のある認知症高齢者に対する施設職員の認識と多職種連携との関連の検証

研究(1)の結果から、摂食困難のある認知症高齢者に対して多職種連携を促進する要因として多職種による情報共有の必要性や食事摂取の改善効果を理解することが考えられた。そこで、認知症高齢者の摂食困難に対する施設職員の認識と多職種連携との関連を検証した。対象数は、研究協力の得られた東北圏内の介護老人保健施設の職員269名（医師41名、看護職56名、介護職53名、管理栄養士59名、理学療法士26名、作業療法士22名、言語聴覚士11名）であった。基本属性（性別、年齢、職種、勤続年数、食支援に関する研修、介護老人保健施設のタイプ、経口維持加算 ・ の算定状況） 認知症高齢者の食事摂取の課題に対する認識、摂食困難のある

認知症高齢者への対応、チームワーク尺度（三沢）で構成した自記式質問紙調査を行った。摂食困難のある認知症高齢者への対応を示す質問項目は、因子分析（最尤法）により「対象理解の援助」（ $r = .825$ ）「満足感への配慮」（ $r = .810$ ）の2因子を抽出した。認知症高齢者の食事摂取の課題に対する認識の回答選択群間で、認知症高齢者への対応の尺度得点、チームワーク尺度得点を比較した（クラスカルウォリス検定）。全体の8割近くは、認知症高齢者の食事に関する新たな情報を毎日収集する必要性を「非常にそう思う」「ややそう思う」と回答した。また9割近くは、食事摂取に関する課題を多職種と共有する必要性や多職種連携により課題を改善できると考えていた。「食事に関する新たな情報を毎日収集する必要がある」「食事摂取に関する課題は他の職種と共有する必要がある」の回答選択群間の認知症高齢者の対応の尺度得点とチームワークの尺度得点は有意差があり（ $p < .05$ ）、施設職員の認識は多職種連携と関連があった。本研究では、施設職員が食事に関する情報を更新する必要性を認識することが多職種連携に繋がっており、認知症の正しい理解の重要性が裏付けられた。この施設職員の認識は認知症高齢者の「満足感への配慮」とも関連があり、認知症ケアの目標となる、本人の意向を確かめながら適切な手立てを探索する連携を促進すると示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高田由美	4. 巻 7
2. 論文標題 認知症高齢者の食支援にかかわる職種の教育実践の現状と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 38-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 高田由美、吹田夕起子、柳修平
2. 発表標題 基礎教育の現状から考える認知症者の食支援における多職種連携の教育的課題
3. 学会等名 日本看護科学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yumi Takada, Yukiko Suita, Shuhei Ryu
2. 発表標題 Development of a Joint Basic Education Program on Dietary Support for People with Dementia from the Perspective of Current Interdisciplinary Cooperation
3. 学会等名 EAFONS2020（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高田由美、吹田夕起子、柳修平
2. 発表標題 認知症者の摂食困難に対する施設職員の認識と多職種連携を促進させる要因
3. 学会等名 日本老年看護学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	柳 修平 (Ryu Shuhei) (30145122)	姫路大学・看護学部・教授 (34534)	
研究 分担者	吹田 夕起子 (Suita Yukiko) (50325908)	日本赤十字秋田看護大学・看護学部看護学科・准教授 (31403)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------